

“ますみの空” 戦争体験

鳴原 眞澄

わたくしは昭和16年11月生まれです。”ますみ”とは澄み渡った夜空を見上げて産婆さんが付けてくれた名前と聞きました。私の年代では戦争にまつわる勇ましい名前が多いので、ちょっと女性的な拍子抜けする命名です。因みに15軒のわが部落では子沢山で、4人の同級生がいて皆平凡な名前です。

私 が生まれて半月後の12月8日には”大東亜戦争”、今でいう太平洋戦争が勃発しました。日本軍が真珠湾への奇襲攻撃を掛けたのです。

わたしの生まれは郡山市の市街から3里（12km）ほど離れた寒村です。今思えば、父も母も開戦の緊張などさらさら無かったのでしょう、きれいな月を眺めた程度だったのでしょう。或いは日本が負ける感覚がなかったのかもしれない。

当然わたしの記憶は生まれたてで無いのですが、母がおんぶして隣部落の爆弾投下の跡を見に行きました。高台の畑のど真ん中に大きなすり鉢状の穴が空いており、「誤爆したんだろう」などの話し声を記憶しています。高い上空を戦闘機が飛んで行くと「ニッポンだあ！ニッポンだあ！」と叫んだのを覚えています。多分家族や近所の人たちの会話を耳にしていたのでしょう。さらに母におんぶされて松根油（戦闘機の燃料）を採る松の根っこ掘りに行ったのも覚えています。母親たちが山を探して歩き回っていました。

19年には妹も生まれ4人兄弟となりました。まだまだ幼く食糧事情などは分かりません。郡山市街の軍需工場爆撃などの話は聞いた記憶があります。

昭和20年8月15日敗戦のことなどは記憶がありません。今は終戦記念日と言いますが無条件降伏をした日です。この翌年だったか少し蒸し暑いとき、母が亡くな

りました。確かめたくて「とうちゃん お母ちゃんは死んだんだない！」の一言が発せられなくて大泣きしたのを覚えています。父は焼香に来た部落の人たちに、戦争が無かったら助けられたというようなことを話していました。妹は母親の実家に引き取られ、男3兄弟が残りしました。家はわずかな土地持ちの貧農で、無理に米を供出して食べる物が無く、祖母がくず米に大根の干し菜（乾燥した大根葉）を入れておかゆを作り味噌で味付けをしたもの、これが毎日で、さすがにまずさが身に染みだしたものです。「食べ物を粗末にしたらバチが当たる！」父の口癖で、その言葉はいまだに沁みついていて食べ物を残すことにとっても抵抗と罪悪感を感じます。

ある日、ジャランジャランと鐘を鳴らし、隣の長男が戦死したことのお葬式で、“次男が跡を継ぐのだろう”などと部落の人たちが話していたことを記憶しています。勇ましく戦って死んだというような雰囲気でした。

部落の中には家を失って牛1頭を飼う狭い小屋を間借りした家族も2軒ほどありました。床はなく地面に分厚く藁を敷いて、その上に蓆を敷きました。トイレも掘った柱を立て、コモをぶら下げて穴を掘って使っていました。ただ、部落の子どもと外部から来た子どもの差別などは記憶にありません。みな、貧しい中でガキ大将が先頭に立って野山を駆け回っていました。周りを見てもどの家も極貧で隔てがなく、惨めさのような悲観的な気分はなかったのです。

小学校入学はやはり心踊ったものです、隣のお姉さんから古い教科書を譲ってもらい形は整えたものの、着る物も履く物も無く、一生懸命勉強しようとする雰囲気・環境は全くなかったのです。むしろ、勉強ができると生意気になってけしからん的な雰囲気でした。

文化的な面では、運動会・学芸会、演芸会、盆踊り、浪曲会、どさ周りの芝居、神社

の獅子舞、これらは大人から子どもまでウキウキして遠方まで見に行ったものです。
どの会場も満員でした。演芸会では父親が剣舞を青年団に教えて”鞭声シュクシュク～・・・”をやり、恥ずかしくて嫌だなあとおもいました。今思えば、人は富や地位、食べ物だけでなく、文化の面も強く惹かれるものだと思います。

私などは空襲や防空壕などの体験が全くなかったのですが、生活水準の面からみるとかなり悲惨であったわけです。人間性の面からみても戦争はなんとしても防止しなければなりません。しかし現実には厳しいものがあり誠に残念です。